

詩

奨励賞

【自由作品】

桑の実

北野 清三

桑の実の熟するころ
そうだ
親の目を盗んで
桑の木に登った
この木は自分の木だと
思い思いの木を
一人占めにして
取っては食い
食っては取り
唇が紫色に染まるまで
熟した実を全部食べ
桑の木から降りると
おれの唇どうやと
お互い確かめあう

それでは駄目だ
紺の袖口で唇を拭き

これでどうだ

まだまだだ

これでも駄目か

まあまあや

みんなで確かめあつて

夕焼け空を背に

明日もまたね

じゃあねつと

自分つちの家へ

帰ったもんだ

髪の匂い

北野 清三

それは真夏の暑い日だった

一緒にバナナを食べていたあの日

急に辺りが暗くなり

光りが走った

真昼の縁側

大粒の雨が地面を叩く

雨のしぶきが勢いよく

二人を濡らす

ぴかーっ

天が破れた轟音

君は私にとびついた

反射的に君を抱き締めていた私

夕立は去り

濡れた地面の匂いが鼻をつく

はつと気づき離れた二人

濡れたシャツを拭くと

君の髪が立ちあがった

ああ これが君の匂いなんだ

君の匂いは 今も私の中に生きている

忘れない 忘れられない

いのちのある限り

私の中に香りつつける